

---

# 散らばった白チョーク

ウル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

散らばった白チヨーク

### 【Nコード】

N8499T

### 【作者名】

ウル

### 【あらすじ】

ある放課後、僕は葛原さんと二人美術室に向かい、そこであるものに遭遇した。「葛原さんはこんなことわざを知ってるかな」  
E エブリスタでご活動中の神崎さんのお題集「レラプスに告ぐ」よりお題をお借りしました。転載作品。

美術室に行くと言ったので僕も付き合うことにした。彼女は僕と違って選択教科で美術をとっているのだが、来週提出の作品がまだ仕上がってないらしく、画材を持って帰りたそうだ。

明日はテスト二日目で僕の苦手な数学があるため、こうして葛原さんに教えを乞うていたのだが、時計を見ると既に時刻は七時を回っている。

「次のバスで帰る？」

「そうだね。あと二十分あるし、美術室寄っても余裕だね」

僕たちの学校は普通教室棟と特別教室棟が連絡通路でちょうどエの字の形に繋がった構造をしている。そのため特別教室に行くのは少々時間がかかってしまう。

「あれ？ 職員室行かないの」

「ああ、鍵はいつも開いているの、あそこ」

昇り階段に向かう葛原さんの背中に問うと、そんな答えが返ってきた。ずいぶんのほほんとした管理体制だが、それでこれまで特に問題が起きていないのならそういうことなのだろう。

「色々噂はあるみたいだけどね」と葛原さんは僕の心を読む。

「噂？」

「うん。運動部の生徒が帰り際に見たんだって」

「何を？」

隣に追いつきながら尋ねると彼女はにっこり笑みを広げる。

「幽霊」

ある意味不気味な沈黙が僕たちの間を満たした。

「えっと……僕にどんな反応を期待してたの」

僕が怖がると思ったのだろうか。そう尋ねるとむっとした視線を返してきたので、仕方なく詳細を聞いてみた。だが詳細といってもあくまで噂は噂でしかない。僕が葛原さんから聞き出せたのは、何

ヶ月か前から、帰宅の遅い運動部の生徒が美術室の窓に度々人影を見るようになったという他愛もない話だった。

中にはその後美術室に行った者もいたそうだが、教室には不気味にこちらを見ている何体もの石膏像があっただけだったという。学校の怪談、七不思議の類だ。

用務員だろうと僕は言ったが、葛原さんはそれを否定する。

「その日の担当の人に聞いても、その時間にそこは見回りしてないって」

「じゃあ生徒なんじゃないの。鍵は開いてるんでしょ」

「まあそうなんだけど……」

葛原さんは小さな口をとがらせる。それがとても可愛らしく、僕は予期せずときどきする。僕らが付き合い始めたのは実に六ヶ月前のことだが、いまだ僕は彼女のこういう仕草に弱い。

悔しそつに考えごとをする葛原さんの横顔に見とれながら歩く。彼女は僕より数センチ背が高いが、顔のパーツは驚異的に小さい。モデル体型というやつだ。

見とれているうちに美術室に着き、「着いたよ」と肩をたたく。

幽霊の正体推理に夢中になっていたらしい彼女はびくりと振り返る。

「うおうっ……驚かさないでよ」

「ごめんごめん」

うおうってなんだ。うおうって。葛原さんはときどきこんな風に残念な感じになるが、そこもまた彼女の魅力のひとつなのである。僕がそんなことを考えていたときだった。

バシャアアン！ コンクリートに大量の小石を投げつけたようなすさまじい音が美術室から響いた。葛原さんがまた小さく叫ぶ。うひょいってなんだ。うひょいって。残念な感じの彼女を連れて僕は美術室に飛び込み、目の前の光景に一瞬呼吸を忘れた。

一組の椅子と机の前で派手に倒れたイーゼル。部屋に充満する油絵の具の匂いの中、しかし異様なのはそこではなかった。リノリウムの床の上、美術室の中央付近から前方 黒板側に置かれた教卓

の足元まで扇状に広がった真っ白な跡。それは砕け散った無数の白チヨークが描いたものだった。

何これ、と葛原さんが実に端的な感想を漏らすのと前後して、大きな音が教室の後方から響いた。

「何！？ え？ 何！？」

またしても葛原さんが叫ぶ。妙なところ口走らないが、それが余計に彼女の焦り具合を伝えてきた。僕は細い肩に手を置いて話しかける。

「ひとまず落ち着こう」

「だって幽霊だよ！ 幽霊！」

「だいじょうぶ。これは幽霊の仕業じゃないよ」

「……ほんとにい？」

「ほんとにい」

いくつか不確定なところもあるが、ひとまず葛原さんをなだめるのが先決だろう。なんだかんだで彼女はかなりの怖がりなのである。声をかけ、何度かいつしよに深呼吸をして、やっと落ち着いてくれる。

「本当に幽霊じゃないの？」

「ほんとに違うんだって。ちょっと待つてくれれば、証明するから不安げに頷く葛原さんがとても愛らしくてくらくらする。くらくらしながらも、僕は砕けて散らばったチヨークにかがみこんだ。仮説を証明するための確証が欲しい。破片を見るにチヨークはどれも新品であつたらしい。僕は破片をひとつ手にとると教室の後ろを見た。箱入りチヨークの紙箱が教室の後ろに落ちているのが目に入った。

大きな音や異常な状況、そして噂を考慮に入れれば、葛原さんが幽霊だと思い込んでしまうのも無理はない。軍病院の跡地に建てられたこの学校には、たしかに元々オカルトじみた由来が多いのも事実だ。

僕は幽霊の存在を否定も肯定もしない。だが少なくとも、この件

に関して幽霊が関与している可能性はほぼゼロと言い切れる。じつくりと部屋を見渡しながら僕は考えを積みあげる。

長方形の美術室はドアから入って右手側の短い一辺が教壇で、左手の一辺は石膏像の置かれたアルミ棚や部の活動表など、美術部関係の備品置き場となっている。油絵のキャンパスはまだ生乾きのようだ。

また、すこし視線をずらせばそちら側のドアが目に入る。僕らが入ってきたとは逆の位置にある、廊下へと続く扉だ。さっきの大きな音は犯人がここから出て行ったためだろう。

犯人。そう、あえてここにミステリの様式を持ち込むなら、これはホワイダニットの問題である。だがフーダニットにも最大限の答えを返すことは可能だ。

葛原さんを振り向くと目が合った。彼女に笑いかけ、僕はこう切り出した。

「葛原さんはこんなことわざを知ってるかな」

すなわち 木の葉を隠すなら森の中、と。

わかるよ、と葛原さんが頷いた。

「ある物を隠したければ、それと似た物がたくさんある場所に隠せ、つてことでしょう」

「うん。僕たちはその木の葉を捜さなきゃならない」

「えつと 犯人？ は、何かを隠そうとしたの？」

しばし言葉を探したあとで葛原さんは偶然にも僕と同じ表現をした。彼女も僕と同じようにこの出来事を捉えているならやりやすい。「たぶんね。なぜなら、ここには森があるからだ」

「森？」

まさか本当に「森」があるとは思っていないだろうが、葛原さんはきよるきよると周囲を見回している。

そしてついに目的のものを見つけたようだった。

「……そっか、チヨーク！」

僕の回りくどい言い方にも文句ひとつつけず、彼女は素直な反応をくれる。

「正解。今回の犯人は幽霊じゃなくて人間だ。だから足もあるし、こんな風にチヨークをぶちまけたのにも理由がある。そしてその理由は、木の葉を隠すことだ」

自分たちの足元を見下ろして僕は言う。そこには叩きつけられたチヨークでできた扇形の跡が残っている。リノリウムの床ではさすがに粉々になるほどではなく、中には大きな破片で残っているものもある。僕の視線を追ってかがみ込んだ葛原さんが尋ねる。

「でも、チヨークの中に何を隠すの」

「それは、美術室という場所と、このチヨークが砕けていることを踏まえれば見えてくるよ」

「チヨークが砕けていること？」

葛原さんの訝しげな声に僕は頷いて、美術室の後ろに落ちていた紙箱を拾い上げる。

「これはそのチヨークが入ってた箱だ。犯人はここからチヨークをその床に叩きつけた」

そこ、と言いながら床の一点を指差した。それは扇形の跡の先端、細まった一点である。

「柔らかいリノリウムでそんなにチヨークが砕けるためには、かなり思い切り投げつけたはずだ。ほら、床にぶつけた跡がついてる」

「そっか。ただチヨークをばらまくだけならぶつけなくてもいいんだ」

「そうなんだよ。犯人にはどうしてもチヨークを砕かなければいけない理由があったんだ。ただの『チヨーク』の森じゃなくて、『砕けたチヨーク』の森に隠さなきゃいけない『木の葉』があったんだ」

こつ言えばわかるかな、と尋ねたが、葛原さんはまだ戸惑った顔だ。その表情を見るとさつさとすべてを告げてしまいたくなるが、そういうわけにもいかないのだ。「ごめんね」と申し訳なさそうに言う葛原さんに心の中で謝りながら続ける。

「葛原さん。ここは美術室だ。砕けた白いチョークに似ているものが、ここにはあるはずだよ」

言いながら視線をちよつとだけ僕の背後に向ける。途端、弾けたような笑顔で葛原さんは叫んだ。壁を埋めるアルミ棚を指差す。

「石膏像！」

「大正解」

そして彼女は周囲に目をやってあるものに目を止めた。どうやら気づいたようだ。

「イーゼルが倒れてるのはそのせいなんだ。犯人は像を机に運んでる途中で、イーゼルにぶつかって落としてしまった……だから、チョークは砕けてなくちゃいけなかった。石膏像の破片をチョークの破片で隠すために！」

僕が説明するまでもなく彼女はすべてを言い切った。木の葉を隠す森がなければ、作ればいい。僕たちが部屋に入ってくることに気づいた犯人はそう考えてチョークを投げたのだ。

「すごいよ葛原さん。よくわかった」

「諒こそすごいよ。見ただけですぐにわかったんだから」

「偶然だよ。運よくこれを見つけたから」

ポケットからさつき拾った石膏像の破片を取り出した。実際はほぼ見ただけでわかったが、謙虚さは日本人の美德である。

「そっか。でもすごいよ」

「ありがとう」

と微笑むと、僕は踏み台に乗って上から二段目の棚から石膏像を取る。整然と並べられた像の中それだけが不自然な方向を向いており、裏返すと案の定、うなじの辺りが欠けていた。葛原さんにそれを示して笑う。

「本当だ。あれ？ でも、どうして隠さなかったんだろう」

「隠さなかったって？」

「だって、犯人が石膏像をその棚に置いてるときに私たちが来たんでしょ？ じゃあ、急いでその破片を拾ってポケットに入れとけば

よかったんじゃないのかな」

それは僕も考えた。いくつかの仮説はあっても、根拠がない。だからこそ、わざわざ長い推理を聞かせてきたのである。

「そのことは、直接本人に聞こう」

「本人？」

「そう、本人だ。こつち側のドアが閉まった後に、廊下から靴の音は聞こえなかった。だから、今も聞いているはずだよ、そのドアの向こうで」

「忍び足で逃げたのかも」

「どうだろう。でも、僕が彼女だったら廊下に隠れて僕たちの様子を探ると思うんだ。だからまだ、僕の三文推理劇を聞いているはずだよ」

そうだろう、と僕はドアの向こうに呼びかけた。しかし反応はない。それを見て葛原さんが何かを言いかけ、やめる。

「……諒、今彼女って言わなかった？」

「言ったよ。犯人はたぶん女の子だ」

「そんなことどうして？」

「この踏み台だ」と僕は先ほど使った踏み台を示す。「これを使つたのに、像があつたのは柵の二段目だった。それはたぶん、犯人の背が低くて最上段に届かなかったからだ。そして確率的に、背の低い男子よりは女の子のほうが可能性は高い」

「諒、すごいね……」

「ありがとう。でも、まだわかつてることがあるんだ」

僕はドアの向こうに聞こえるように大きめの声で続けた。

「彼女は美術部じゃない。僕たちのひとつ下の一年生で、髪は黒のショートカット。たぶん眼鏡はかけてないね。それに、名前は、梅野沙希」

ガチャリとドアが開くと同時に叫び声。

「どうしてっ！」

それがほとんど悲鳴に近かったのも無理のないことだ。

「簡単だったよ」僕はそう言っているものを取り出した。「ドアの前に落ちてた」

それは今僕たちの目の前にいる女の子　梅野沙希の生徒手帳である。撮影後に伸ばしたらしく、髪が写真より長いのは残念だ。

「なーんだ。感心して損した」

「だから私が戻ってくるって……」

「そう。世の中そんなものだよ」

二人の言葉に僕は苦笑を返した。梅野さんに生徒手帳を手渡すと、僕が尋ねる前に質問をされた。

「でも、どうして私が美術部じゃないってわかったの」

「それは、その部活予定表によると今日は部活動があるのに、梅野さんが今からテッサンを始めようとしたからだよ。だから、部員が残って作業をしているわけじゃないと思ったんだ」

噂の件もあったからね、と付け加える。

「ふうん、なるほどね……」

梅野さんが何か含むような調子で言うので、僕は妙に思いながら質問をした。

「じゃあ、どうして破片を隠さなかったのか、そしてどうして美術部員じゃないのにこんな時間にここで絵の練習をしていたのか、教えてくれるかな」

梅野さんは一瞬驚いたような顔になってから、ゆっくりと口元を緩めていった。インクの染みが広がるような、あとになって考えると嫌な笑い方だったと思う。

それが、これから一年以上にも及んで僕が恐れ続けることになる笑顔　僕の平穏な高校生活をぶち壊す恐るべき笑顔であることを、その時の僕が知るはずはなかった。

(後書き)

日常の謎に挑戦してみました。一応いつか書きたい長編作品のプレローグだったり一部だったりするのですが……うん、いつか書きたいですね。いつか。

ミステリと呼ぶにはちょっとおこがましい気がするほどの小品ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8499t/>

---

散らばった白チョーク

2011年6月5日17時55分発行